世界の果ての驛舍——詩群2014-2016

中田満帆

a missing person's press

装丁——著者自装

中田滿帆

a station house in the world's end / poems:2014-2016 / Mitzho Nakata

世界の果ての驛舍——詩群2014-2016

for Seiko Araki, Junji Nakajima ("boocks Curlis")

＊
ロードムービー　＊10
場所　＊13
有情群類　＊16
休息　＊19
潤滑油　＊22
よそもの　＊25
二宮神社　＊28
Chikatetz No Yotamonotachi　＊30
新神戸駅　＊32
アニス　＊34
月曜日　＊37
平原の火　＊39
檻　＊42
終わりの手　＊45
不実　＊47
移民局　＊49
武装　＊52

七月　＊54
夏祭　＊56
訣別　＊58
拳闘士の休息　＊61
労働　＊64
大聖堂　＊67
冷蔵庫の背面パネル　＊73
ことの終わり　＊76
ラヴ・ソング　＊79
聴雨　＊82
天使　＊86
＊
no title 無題　＊93
そして遊戯はつづけられる――あとがき　＊95
何時来るかキイ・スミス／森　忠明　＊99
著者来歴　＊101

とうに夜がふけてしまった。ぼくは主題を撰ばなければならない。けれど書くべきことや、書きたいこと、書くべきでないだろうことをおもって呻吟してる。いまは物語を書いてる。書いては消し、消しては書く、そのくり返し。なにをどうやっても気に入らない。ふるえるような冬の燈りが窓のむこうに照ってる。気がつくと、もう一月だ。まともな小説から遠ざかって三年になる。そのあいだぼくは一昼夜を呑んで暮らし、もう一昼夜かけて吐きだしただけ。ほかにできることはかつて愛したものたちを憾むこと、罵ること。だれかれかまわず鉈をふりまわすことだ。こうなってしまったのも運のめぐり合わせというものだろう。だからけっきょく書けない状態、あるいは書くことに身の入らない状態を愉しんでやるしか為す術はない。おそらく新しい仕事がぼくを高めてくれる、そうおもってねばるしかない。今週はずっと、雑仕事を求めて、求人広告や町なかをさまよった。それで清掃、食堂、解体の三つにいき当たった。けれどいまは文なし、仕事にまつわるもろもろを手にいれるにはどうしても金が要る。日曜の夜は大して書くこともなかった。いまは寒さをやり過ごすしかない。鈎吊りにされたけものみたいにぼくは力を喪ってる。

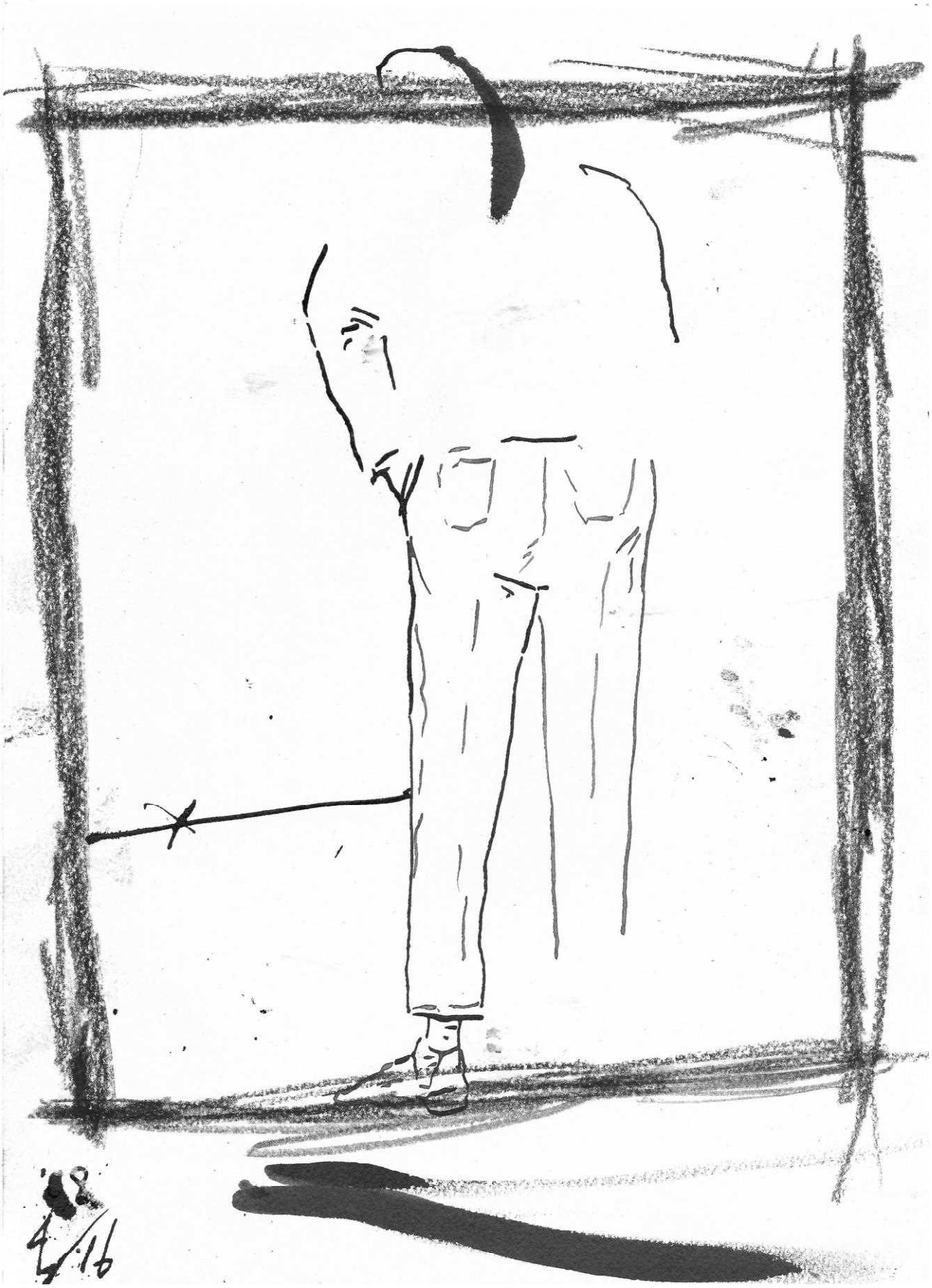
かれらはたがいになにものかを識らない
むしろ識るためにともに歩き、または走る必要があるということだろう
わたしがおもうに自動車や道は、自動車や道のように見えるだけの装置であって、
それらそのものではない道標なのだ
映画はそこに介入するものの、かれらの関係を解釈しようとはしない
それはしてはならないことなのだ
だからこそ映画は映画でいられる
映画は決してかれらに介入しはしない
やがてかれらがわかれようが――かれらはわかれることになっている――映画はなにもしない
それが映画を映画たらしめてるのだ
では観客であるわたしはいったいなにをしてるのだ？
それはおそらくかれらを追うことだ

わたしはかれらなしではいられない
かれらこそわたしを奮い立たせてくれる存在だから
遠く、遠くのほうまで追いかける
やがてすべてが暗転して
なんにも見えなくなるまで
ロードムービーはつづく

場所

きょうはヴィム・ヴェンダースの写真集をみて過ごそう
"Places, strange and quiet"
静かで見も知らない場所を求めながら、さ
きみはかっていったね
ぼくのことがきらいだと
あのとき一二歳だったぼくらも三十となった
ふるえる稜線をたどって厭きなかったあのころ
ぼくはすでに知ってたんだ
自身が望まれてその場所にいるのでないことを
ありがとう、さようなら
そうしてさらにありがとう、さようなら

ぼくの知らないとこできみは大人になった
きみの知らないとこでぼくはできそこないの人間になった
ありがとう、
そしてさようなら



有情群類

ビルの解体がついに終わった
目的も地理も見喪って
枯れた花が憐れみ
澱んだ水が泣き
冷蔵倉庫の夜勤どもが時計に締めあげられてるあいだ
ぼくはできるかぎり粗野なふるまいをし、
ひとり芝居に酔ってる
こいつは病気にちがいない
タイプミスに苛立ってあらんかぎりの声々をタイプする
ぼくは新しい国をめざす一匹の老いた青年だ
アーチ状の詩形が夜の窓にかかって
注意ぶかくぼくはその手を伸ばす

有情群類よ、
かってあんなにもきらってたおまえを
いまになって好こうとしてることをどうか赦して欲しい
方角は色彩の一種だ
もうじきそれはぼくの顔を照らすだろう

age:
21
MISSING

休息

夜の果てを待って休息にでかけよう
頬を打つ葉の、
葉脈をポケットに集めよう
けれども陽光をおれは決して諒解しないだろう
消してしまいたくなっちまう
ひとりぼっちの窓にそれはあまりにむごたらしいからだ
更正センターの黒い陰
"nada" のひびきがどこまでも路を匍い、
おもわずおれは眼をそらしてしまってた
ああ、そうともほんとうは怖いんだ
夜のあいまも午のあいまもおんなじくらいに
そのとき老人みたいなものがおれとかさなった

そいつの声がこういうんだ、
おまえは愛を知らないって
人生を知らないってな
夜の果てを待って休息にでかけよう
おれは愛を知らなくちゃいけない
おれは人生を知らなくちゃいけない
たとえそれがみすぼらしく、ちっぽけなものであろうとも
苦しさの押し売りにさよならを告げて

潤滑油

真夏の午后にしらふのまんまで歩き通し
全身にグリースを塗り込んだみたいな汗
おれは物語のはじっこでグリースを手でぬぐった
背中もつきでた腹も顔も腕もなにもかもがグリースにまみれて
みっともないありさま
今月はバックビートで歌を唄い、
雑誌の会合が待ち受けてる
ギターを修理し、
あたらしい楽器も買わなくちゃならないときた
来月からはレコーディングも
歌と詩を録音するんだ
待ってろ、

地獄め
蝿みたいにおれは未練がましい
一年まえの失恋
二〇年ちかい片おもいをひきずって
贈った詩集にはなんの返事も来なかった
いっそ送り返してくれればかの女を怨むことだって
かならずやできるようになるってのに
もはやそんな感情の発露もできず、
おれはグリース漬けの死体
汗よ
ただおまえを怨みながら
かの女とのことを
おもいだす

よそもの

自滅を抱え
放熱もできずに
怠惰を糧に
みずからの畑を耕すとき
遠い森林のむこうから
ふいに葉が流れ
胸にぶつかる
ぶつかって倒れそうになりながら
丘からやってくるトラックに車にバスへと唾を吐く
恢復の期待は打ち砕かれてまたしても孤立へと帰る
もしもきみが並木みたいにずっと立ってたら
こんなことにはなりはしなかったかも知れない

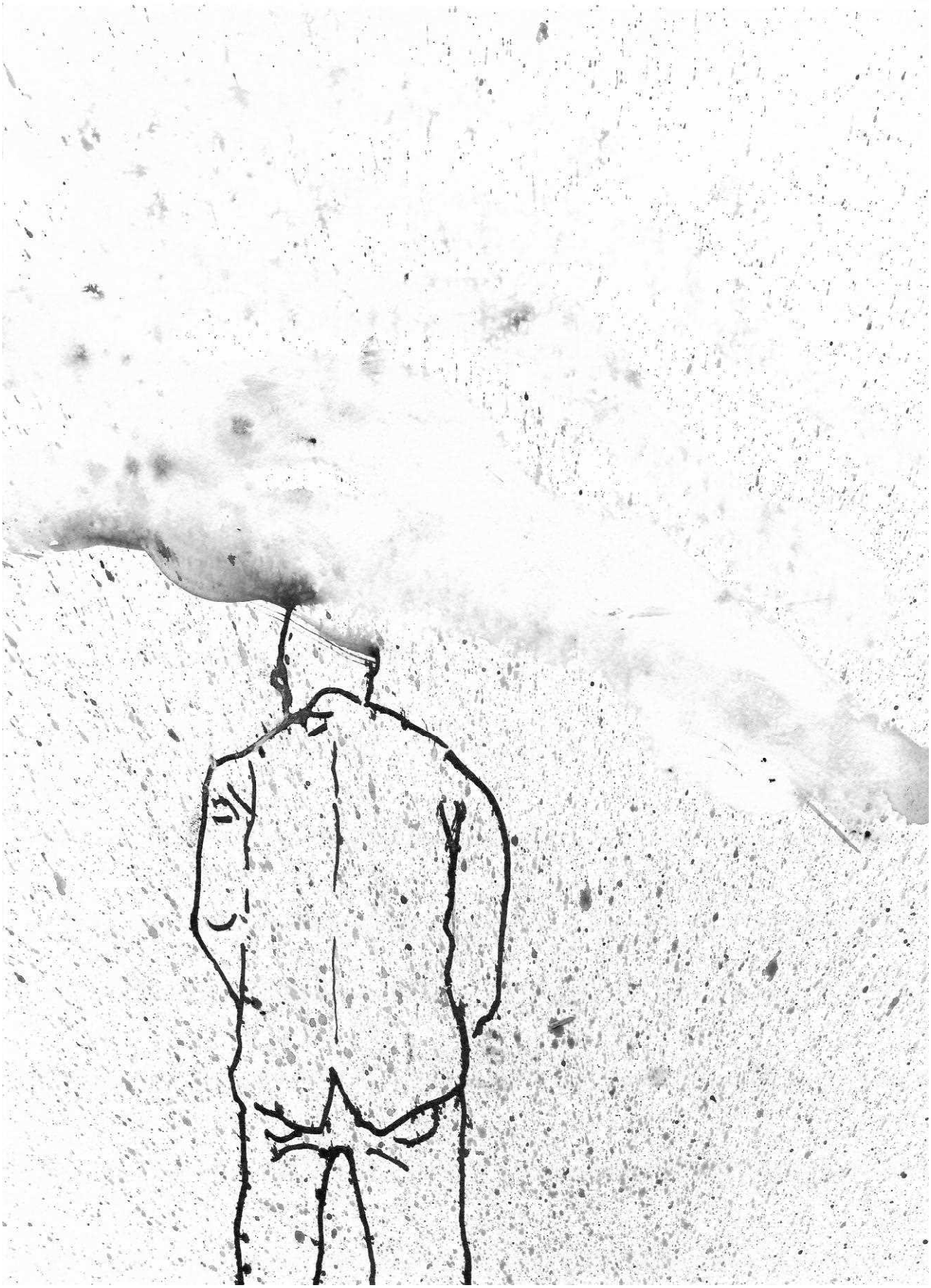
くだらない労働と疵痕をみせるタイムカード
パンチマシーンは蟹みたいな突起をざらざらとさせ
つぎの犠牲者を呑みこみ、さらにつぎの犠牲者を呑みこむ
喪ってしまった風景もひびきも色彩も
莨をはじまで吸い、
死人になって、
路地をさまよう
ここは自身の土地じゃない
よそものはよそものでしかなかったんだ

二宮神社

けれども枯れた木立ちはなにものも慰めはしないだろう
ただ諒解もなしにぼくのうちに列んでるだけだ
夏の盛りをまっすぐにゆく路
むなしさは消えない
対話もなく
寂寥のうちを通り過ぎてったひとたちよ
透き通った茎みたいにその断面は涼しい
ちょうど終の出会い顔みせて
ぼくは手水を唇ちにする
けれども朝になってしまえばすべては失せ
みえなくなったぼくがしたたかにかぜの殴打を受けるだろう
どうぞご勝手に、だ。

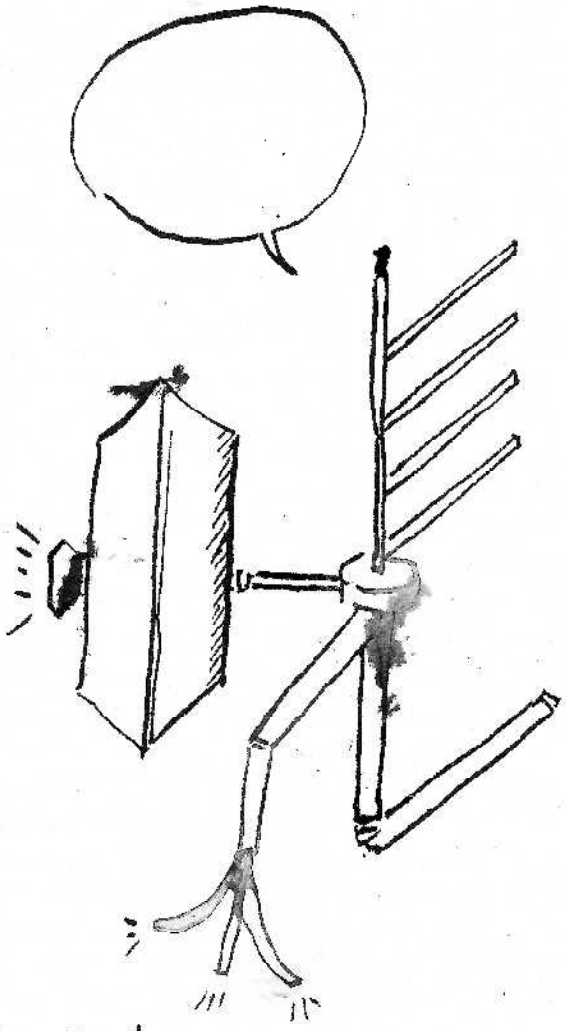
Chikatetz No Yotamonotachi

買ったばかりのバスキア画集を手に、死んでしまった姉の墓参りをしようとしたら、母にとめられてしまった。バスキアが縁起でもないというんだ。たしかにかれも若死にだった。猛スピードで現れて消えてしまったものたち。わたしは悪しくもそんなものたちが好きだ。それというのに母にはそれがわからないという。たしかにかれらはいいやつではなかった。ジム・モリソンも、イアン・カーティスも。しかたなくわたしは地下鉄に乗っては駅の便所に花束をうち棄ててきてしまった。やがて腐りきった花々が駅員によって処分されるのを承知のうえでだ。わたしは気が狂ってるにちがいない。姉は二十九になるまえに死んだから、わたしよりも年下ということになる。葬儀には呼ばれなかったから、かの女の夫の顔さえ知らない。物理と数学に長けた姉、いっぽう藝術にはいっさい関知しなかった姉、もう幾年も会ってなかった。おぼろげなかの女のふるいまいと顔よ、そうかあなたは墓にまでわたしを拒むのか。砂を噛み、臍を啜っていきてる汚辱の弟よ、おまえ、どうする？ おまえ、どうなる？ かつて父はルンペンを指さしていった、――おまえはいずれそうなると。けれどそうにはならなかった。ただ恥辱のうちに沈んでっただけだ。地下鉄の階段はいずれ暗がりに降りていく、そこへ四人の青年が立ち現れた。やがてつまらない死に方をするおれ――という韜晦。かれらは若く細かった。まるでアントン・コービンの写真みたいにモノクロームに映り、ひとりだけがわたしに眼をむける。かれもバスキアが好きなんだ、おそらくは。そうおもいながら阪神線の改札をぬけ、大通りはむこうの墓場へと長い坂をのぼる。バスキアをひろげながら、だ。ただ四人の青年の物語はまたいずれ、ということで失敬する。



新神戸驛

赤毛のあの子がみつめる
マッド感のある駅舎
そいつは建ってるだけで美しい
積年の汚れが魔法をかけてくれてる
愛は雨にとけ、あらゆる側溝に光りを打つ
もうじきおれはあの子に道を尋ねるだろう
でたらめな番地を語り、
それが物語となる
いくらぶちのめされても
魂しいのほとりは崩れやしない
さよならを決めて雨に歩きだすんだ
そうきみらがうまくやりおおせたようにね
ああ、おれのかたわらをひとびとが遠ざかっていく



42度で飛びあがる

アニス

たぶん高尿酸血症だ
関節液の尿酸結晶がうちがわから足を突き刺してる
歩けないんだ
躄りみたいに足を地面に擦りつけながら
ラブホテルを抜け
コンビニエンスへとむかう
これがほんの風穴であったらいいとおもう
しかし手遅れだ
生は藁を咥えた犬
地上の塵を日が輝かせ
遠くの角を曖昧なものにみせたがる
自身の性質によって放逐されたもののための幻し

だれとも仲良くはなってはならないとはじめから決められたてたかのよう
酒をひとりで呷り、呷ってはタイピングをつづける
この世には少なくとも四つの救いがあった
絵を描くこと
ものを書くこと
音楽を鳴らすこと
そして手淫すること
公園は猫たちでいっぱい
アニスを喫う
イタリア国旗を模した箱の、
かの国の莨を

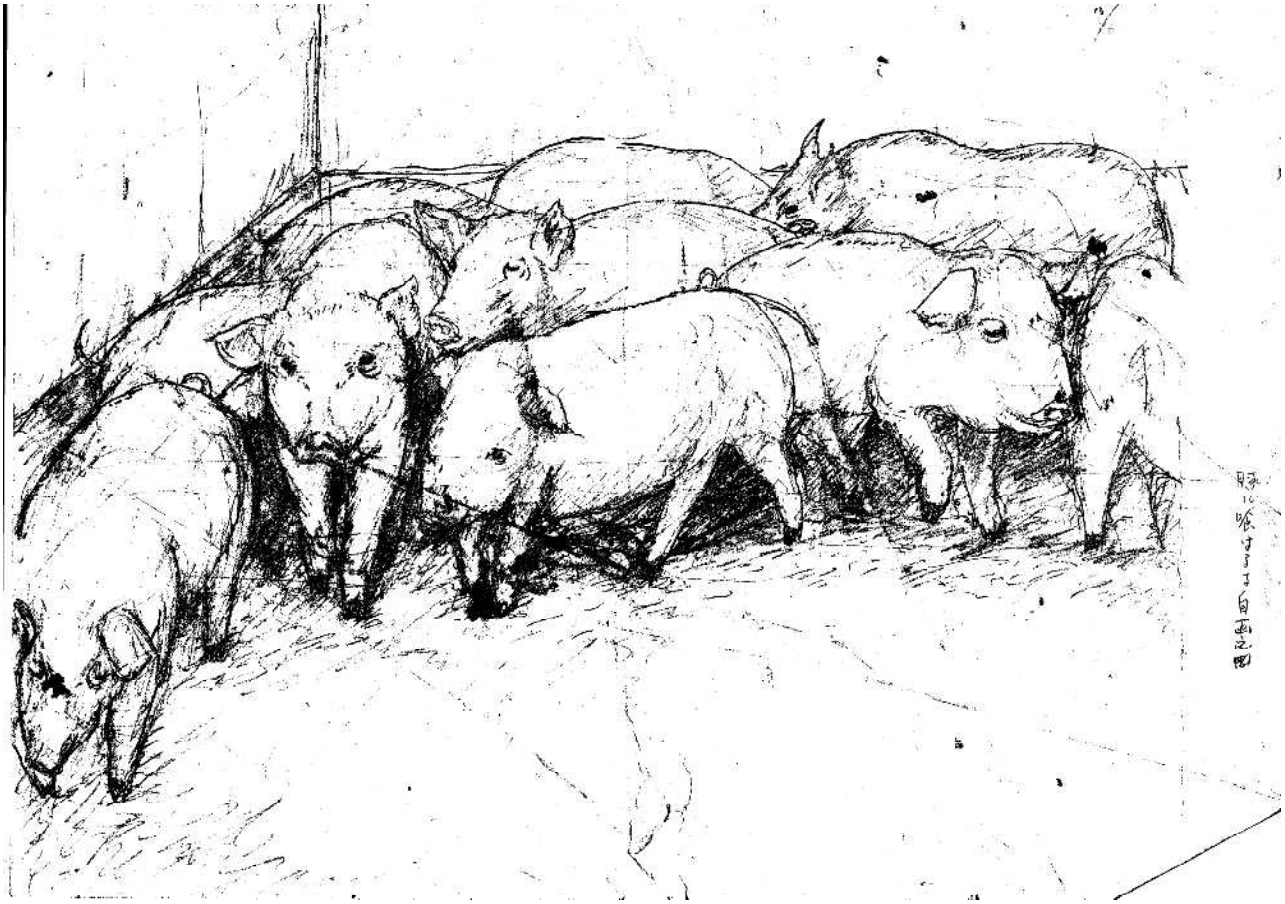
月曜日

たえがたいところからきて
そしてたえがたいところにたどり着く
ひとのない発着場で雨に流されながらおもったもの
最初にはみだしてしまったものはなおもはみだしつづけると
家には帰りたくはない
けれどもだれも連れてってはくれない
――こういった無意味な哀傷をなでまわすおれも
――とんだおかまやろうだろうか
けっきょく湿度が高すぎるんだ
バスはバスのまんまだし、通りは通りのまんまだ
けれどもこうした感情は感情ではない
ひとりでいつまでも歩くがいい
かたわらにはだれも？
ああ、そうとも。

平原の火

麦秋はもうじき終わる
そうしてぼくは列車に乗り
窓際の席に着くのに詩論はいらない
群小詩人にとっての車窓は平原のかすかなる火
手のひらや顔をそこへ押しやって熱さや傷みをもってして
次の一行へと乗り換えてしまうんだ
さあいくんだ、
摂氏四〇度の地獄へ
あのムンクが素裸になった自画像の地獄へと
もうみえなくなった連中なんてうっちゃれさ
洗濯屋の伝票みたいなちっぽけでどうしようもない愛惜に背をむけて
走りだすんだ、

青電のアナウンスがいくら愛しかったものたちを炙りだそうとも
ひとりでいけ
ひとりでいけ
ひとりでいい
蔦の帽をかむり、あとの祭りだってかまやしない、
詩なんぞ書かなくたってもういいんだ
平原の火にその身を横たえてろ！



檻

知らない土地から訪ねてきて
知らない土地に帰っていくもの
あるいは留まりつづけるもののために
寝台を仕立てようじゃないか
もし暗い寝床のなかで自身に目醒めることがあったなら
これ幸いという気分でかれらを綿で締め殺すんだ
この人間動物園のうちがわでぼくの学んだこと
それはほんとうの敵を探すこと
でもそれはいまだ姿をみせたことがない
ぶ厚い壁に押し込められ
帰っていくところもない
ほんのちょっとの気まぐれで

きみに会えることができたなら
もうこの壁は無用になる
どうか信じて欲しい
ぼくというぼくが
新しい事実のための
かげだということをだ
きみのための事実
ぼくのためのうそ
そして知らない土地から訪ねてきた、
男たち、女たち、子供たち、老人たちよ
檻に入り給え

終わりの手

終わりの手のなかで磔にされたイエス
おもての審問はさわがしくむじゃき
その信仰のない手のなかで
そいつはあまりにみじめたらしく悲しい
ちいさな室がカセドラルみたくその手の主を囲い、
そして奪えるものがあるとすれば奪っていく
しかし奪えるものなんかとうになくなってて
幾年に及ぶ怒りと憤りだけがかれの骨をしゃぶってるんだ
望むとすればこの現身から遁れるための洞穴
あるいはなまえのない鉄道
少年時代
かれはわかってた
自身が出口のない森に立たされてるってことを

不実

不実さよ、そのみのりをぼくにおくれよ
どうか信じて欲しいんだ
列車に乗り遅れたこのぼくが必ずさきにたどり着くことを
お呼びでないのはわかってるつもり
けれど忙しいひとのなかを縫って
ぼくは死に急いでやる
これだけがぼくの復讐だ
遙かさきのシグナルよ、気をつけろ
遙かさきの駅舎よ、気をつけろ
必ずや不実の輝きをもってしてそいつらを倒してやるんだ
不実さよ、そのみのりをぼくにおくれよ
どうか信じて欲しいんだ
列車に乗り遅れたこのぼくが必ずさきにたどり着くことを

移民局

さみしい季節がやってきて
窓のなかを涙ぐませた
大きな鳥とともに
かれらはやってきて
茫漠の移民どもを
連れ去ってしまうんだ
もうなにをいっていいのかもわからない
ぼくらはかつて善性のために戦ったのに
それは果たしてぼくらの妄想だったなんて
監視委は通知一枚も寄越さなかった
悲しさでいっぱいなった室でおきざりにされた人形
片手がもぎとられ、それでも笑顔を崩さない

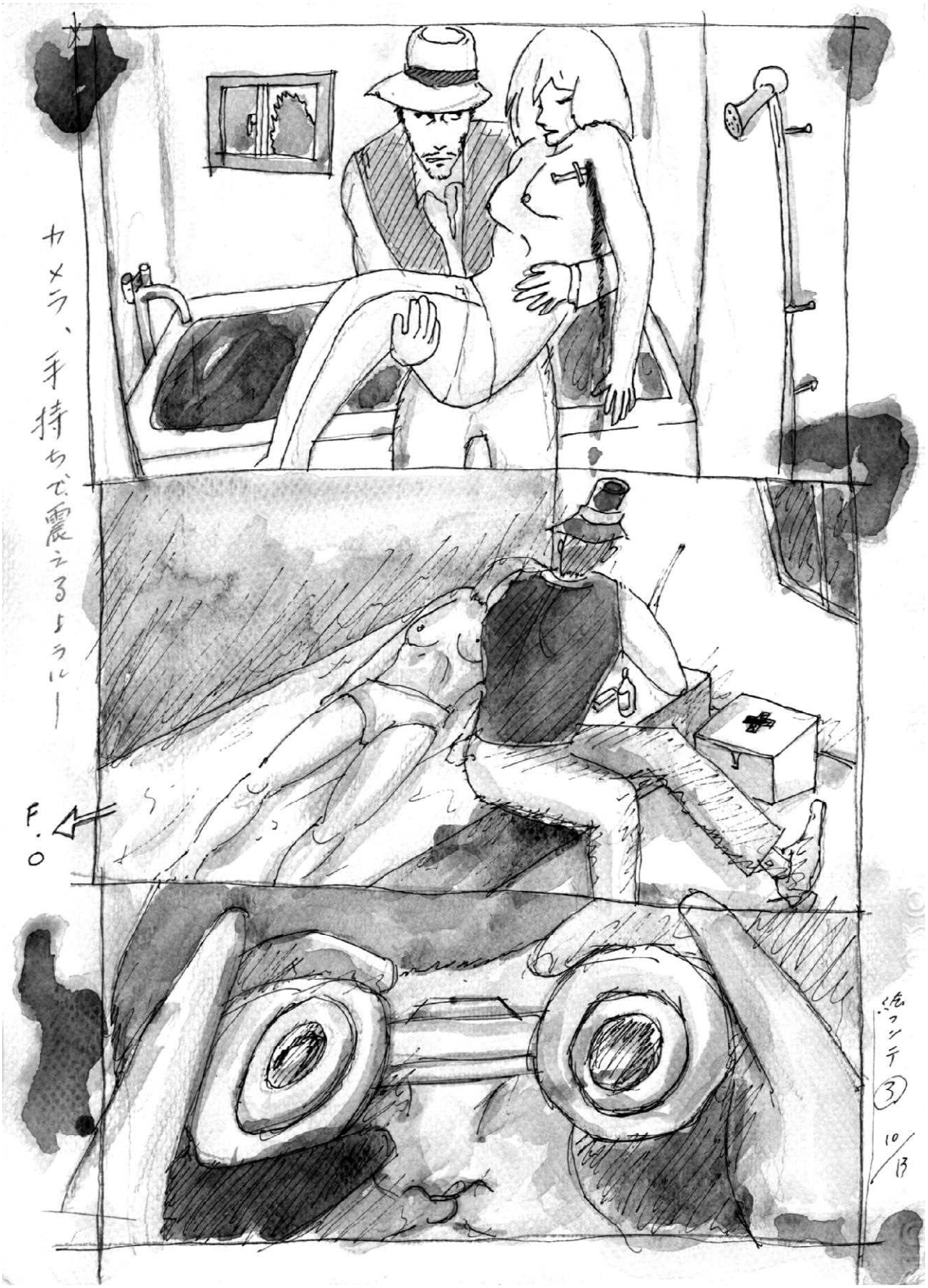
まるきっりぼくらそのものじゃないか
移民局の壁のなかでふるえながら待ってるもの
それらも人形とおんなじだった
ぼくらはまたしても知らない土地に帰される
またしても知らない土地の住人にかわる

武装

もってるものが手折れた茎ならば
それがきみの最良の武装だ
たとえきみが素裸であろうとも
そいつがきみの標べ
わらべ唄をうたい
プールサイドに立つきみが羨ましい
きみはいま最良の存在だ
（たとえここに言の葉がなくとも）

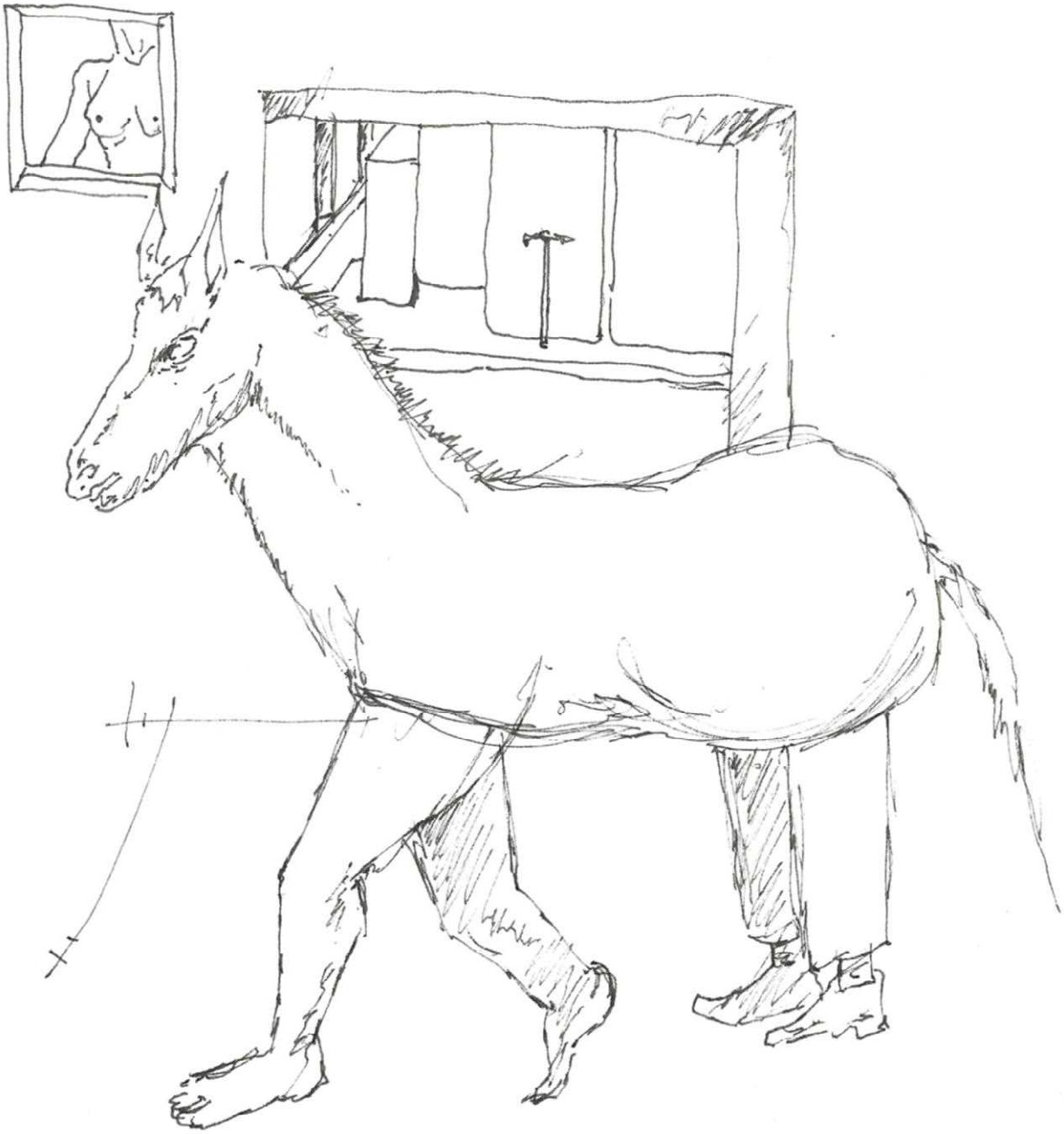
七月

またしても雨は降らなくなったし、
またしても夢をみなくなった
あらゆる遊びは赤信号を越え
つぎつぎと死んでしまうもの
放水が高くあがって
なしくずしにこの月も終わりをみせはじめる
ああ七月よ、ぼくの産まれた月
いったいどうすれば
なにを成し遂げたら、みんなに赦されるだろうか
聴いたことのない訓戒を求めて
燃えあがった道路を歩く
あるところまでいったときだ
光りに射抜かれたもうひとりのぼくが
野良をつれてしずかに川のほとりへと消えてった


カメラ、手持ちで震えるようにー
F.O
絵コンテ ③
10/13

夏祭

赦して欲しい
たとえぼくが生きる側からいなくなっても、
それは生田川みたいに浅い流れに過ぎないのだから
空気が熱に膨らんでって
たしかに過古を甦らせてる
どうか連れ去ってくれ
縁日の世界へと
もういちど
夏祭のかのひとを眺め
うっとりとしてたいんだ
ぼくの小さな港よ
船は帰航を拒むばかりだ
赦して欲しい、たとえぼくが生きる側からいなくなっても、
うっとりとしながらかのひとを眺めてるからだ
どうか連れ去ってくれ



訣別

べつにどうってことないってきみたちはいうだろう
でもおれには出会いがないんだ
きみらに会ったのも遠い昔のこと
みずからを嘖むにはちょうどいい年ごろ
給油所を襲いたいんだ
だれか手伝ってくれ
でもだれもここにはいないんだ
大人になってなにが得になったというんだい？
酒も莨もポルノもすっかり色褪せて
なんでもないというみたいな顔を仕向けてくる
きみらは二枚目だ
だからそうってことないだろ？
おれみたいに醜いやつを
おれは観たことがない

だれか高速の路電にのせくれよ
流線型のすべて
流線型の髪型ですべてを吹っ飛ばせるやつに
手紙なんかもう書かない
黙殺のなかで耐えることはもうできない
だからぼくは自身を葬るよ
もしもきみらが笑ってくれるのならば

拳闘士の休息

試合開始はいつも午前3時だった
父にアメリカ産の安ウォトカを奪われたそのとき
無職のおれはやつを罵りながら
追いまわし
眼鏡をしたつらの左側をぶん撲った
おれの拳で眼鏡が毀れ
おれの拳は眼鏡の縁で切れ、血がシャーツに滴り、
おれはまた親父を罵った
返せ！
酒を返せ！
おまえが勝手に棄てたおれの絵を、おれの本を、おれのギターを！
凋れた草のような母たちが、姉と妹たちがやって来て、
アル中のおれをぢっと眺めてる
おれはかの女らにも叫ぶ

おまえらはおれを助けなかったと
おれが親父になにをされようがやらされようが助けなかった！
だれがおまえらの冷房機を、室外機をと叫んだ
おれは姉にいった、――おれはおまえのタイヤ交換をしたよな？
じぶんの仕事を遅刻させてやったのにありがとうもなかったよな？
照明器具の倉庫をおれは首になってた
おれは姉のつらを撲った
おれの拳がなんとも華麗に決まったその瞬間
いちばんめの妹から階段のしたに突き落とされた
おれの裂傷した後頭部からまたしてもくそいまいましい血が飛び散った
不条理にもおれには血がおれを嗤ってるみたいにみえてならなかった
気がつくとおれは暗がりに立ってて警官ふたりとむかいあってた
おれは――といった、ポリ公はきらいだと
かれらはじぶんたちの仕事を刺激されて少しばかし悦んだ
しかしおれはそれ以上かれらを悦ばす気にならなかった
だから、さっさと寝るふりを決め込んだんだ
そして明くる日おれは町へと流れてった

労働

かの女もおれも労働なんか信じちゃなかった
報われること
贖われることのないのを知ってた
売店でたやすく売り買いされてしまう生活
美しい仕方の勘定をされてしまう生活
週ふつかは仕事をさぼり遊んでた
蝋石でかかれたつたない線の世界でだ
発送伝票の、黒い一点に躓いて
ハンド・リフトの手を放してしまう
おれたちはまだ二十三歳だった
おなじ道場町の落伍者だった
やがてかの女のために仕事を

for yuri nakakubo

もっと憶えようともしたりした
なんとか話しをしようとしたりもしたっけ
なんでもないことがどれほど至上かとおもいながら
あるときかの女の退職を知った
おれはかの女にいった
――本をだすんだ、これがゲラさ、あげるよ
そして永遠の別れをみつけたというわけだ
その翌日おれは福知山線を無人駅をめざして乗った
そして解雇された
追い放たれて
潰れたスーパー・マーケットの頽箱で暮らした
何週間も凍えながら
幾度も量販店で盗みをしながら
そこが封鎖されると放浪にでかけた
四年を経てこの室にたどり着くあいま

大聖堂

ウォーホルとカポーティとブローティガンはともに父を知らず
母性のつよい影響下で育ったという
そのいっぽうでブコウスキーは母の存在が薄く
父の打擲と恫喝に苛まれてたという
おれも母をほとんど
知らないと来る
かの女はつねに父のうしろにいてみえなかった
十歳下の妹できてからはパートタイム労働者になり
さらにみることがなくなった
深夜を弁当屋で過ごし
午はゴルフ場へと
赴く
やがてかの女は自己啓発本や

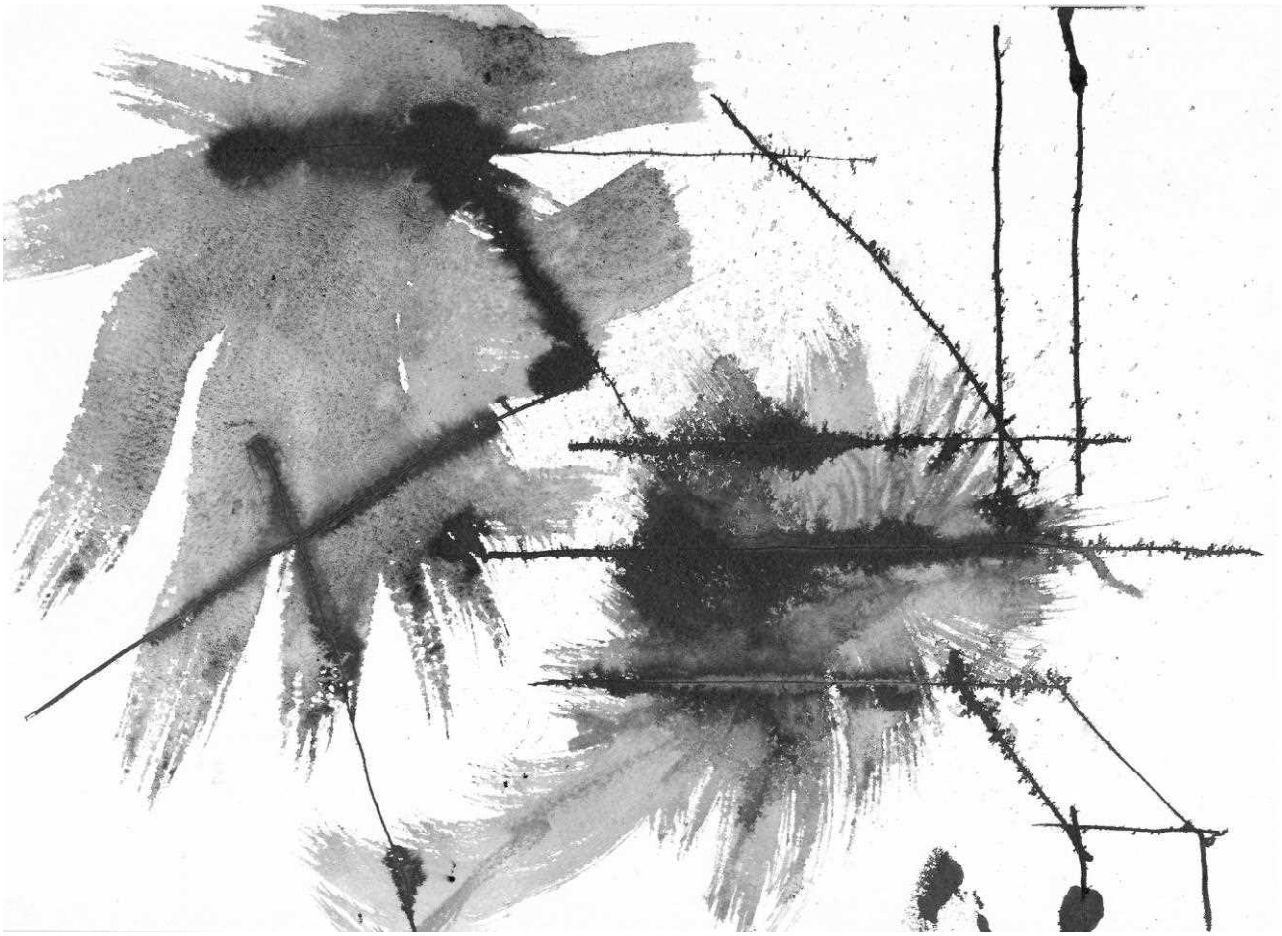
両親へ

安手の幸福志向にそまってった
いちばんむかむかさせたのは
幸運の絵や写真――ブロック・ノイズまるだしの紙額
そんなものを額に入れて玄関やくそ狭い便所に飾ってた
そのいっぽうでおれはちゃちなビクトリア幻想の、
父による解体と増築のレッスンがあった
アントンの大聖堂じゃないけれど
幼い時分からその建築
は始まってた
離れは母屋を侵食し
妄想は現実化してしまう
あるときは数字についてのことで
あるときは角材の長さのまちがいで
全人格――存在そのものを否定された
やつのお気に入りの文句はこうだ、――ばかもちょんでもできることもできてない！
長い恫喝ちみた説教がいやで逃げようとすれば金槌の柄で撲られた
なんでこんなことばかりなんだろうっておもってた

十六歳の夏、父は母屋の屋根を解体して平屋に二階をつくってた
しかし自身との自己同一化を拒絶したおれにぶち切れた父は
おれの髪をめちゃめちゃに剪り落としてしまった
それでも抵抗することができなかった
生野高原というくそったれな田舎には、
逃げ込む場も仲間もなかったんだ
やがて母が帰ってきた
いつものようになんの変わりもなくて
おれの頭をみてもなんにもなかったかのように
通り過ぎていくだけのことだった
そのさわり、ふとおもいだしたのは
生瀬にあるバレエ教室だった
ひとつうえの姉がそこで
習ってるのを
母は見学し
おれはおもての
螺旋階段のまえへと

退屈むきだしで抛りされ
まったく見棄てられてしまってた
わが家の王妃たる姉は理知にも容貌にも立場にも恵まれてたけれど、
おれと来たらなにもかもがでたらめでことばすら満足でなかった
――いまも書いてるからこそ言語を発することができる
ともかく母はいつも半分いて半分いないようだった
日雇い仕事がうまくいかなくなったとき
おれは次第に母を攻撃する喜びを
アルコール漬けの脳のうちで
知った
金をせびり
料理を床にぶちまけ
おまえと呼ぶ
なんという愉しい虚無なんだろうか！
このために母は存在してたのか！
放埒が去ったいまも
夢想する

かの女を罵ることをだ
いまも惨めに働きつづけるあいま
父はじぶんだけでスペインやイタリアへと旅をする
神さま、どうかかれの飛行機が消息不明になりますように、だ
角の"Academy Bar"で一杯千円のギムレットでもやりながら
あのくそったれな大聖堂の没落を静かに心地よく聴きたいもんだよ



冷蔵庫の背面パネル

おれは部品配送の運転のために採用されたはずだった
わざわざこんな田舎町へやってきたのは
そういった楽な仕事を望んでたから
そうともおれは世間知らずで
おまけに恥知らず
だのにひと晩あけて寮をでると
流れ作業のおでましだ
歳を喰った男がいった、――だれだ、こんなできそこないを連れてきたのは？
おれはおもった、――こいつは従順な相手にしかそんな口は叩かないと
そうともおれは従順な屠場の羊に過ぎなかった
だから罠を求め、罠にかかるんだ
背面パネルに次々と妙なものを
貼っていって終わりはない
おれはまたしても倒れてしまいたくなる

だってそうだろう？
話しがまるでちがうんだからな！
ようやく昼食がやってきたとき
おれはやめることにした
たった一日で
その通り、寮に帰ってくると
話しがちがうと噛みついて
その日の給料とともに
町へと舞い戻った
けれどもどこにもいきばはなかった
無賃乗車で海を渡ってトルコ風呂の配車係になった
自動車恐怖症のおれにはいったいどうすればぶつけずに済む方法がわからない
夜の休憩時間になっておれは社長からもらった金を握りしめて逃げだした
かれから貰ったネクタイを路上へおきざりにしてだ
そうしてまたしてもからっぽになったおれは、
おれ自身の性質によってまたも放逐される蝗だった
つぎの虫籠はいったいどこに？

ことの終わり

おもってたよりも終わりは早いもの
三十年かかって手にしたぼくの事実
おもいのほか温かくうちがわにそそり立つ
死地というものは花に充ち
あらゆる科白を断ち切ってくれる
どうかためらわないで
頼む
踏みつけにして
ぼくの墓に唾を吐いて欲しいんだ
遠くで鳴ってる警笛
近くでひびいてる信号
だれともかわせなくなった合図がぼくときみたちのあいまを走る
どうかためらわないでいらだちよ、それを蹴れ

ことの終わりはおもったよりも早いもの
黄色で下地を
赤で輪郭を
そして青で中身を塗り込めてしまえ
きみたちにならできるはず
だってきみらはぼくがきらいだもの
なんにもいえなくなるまえにこれだけはいおう
すべてのぼく、ぼくというぼくはうそであるとだ。

ラヴ・ソング

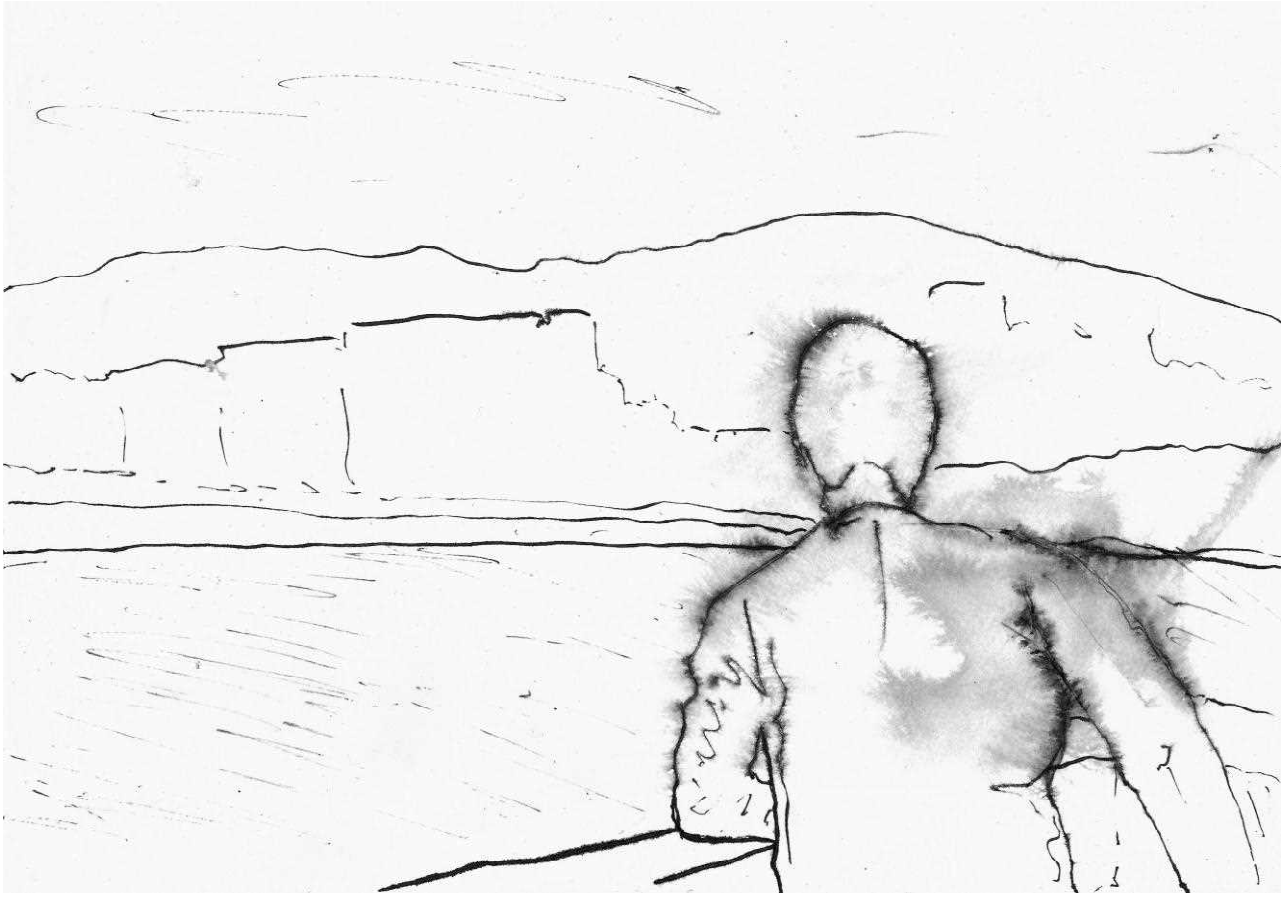
おもうにどの女も売春宿からやってきたんだ
けれどもかの女たちに金を払っても
触れさせてもくれない
かつて熱をあげた少女たち
いまは世帯持ちで
男たちから給料を吸いあげて暮らす
どっか東部の町で平凡さを謳歌しながら
ある女は亭主をおっぽりだして同級生だった男らと遊ぶ
けれどそのなかにおれはいない
遊ぶ相手なんかいやしない
だれもない世界の、
その待合室に坐ってひとり遊びに興じるだけ

おれはおもいだしてる
かつて熱をあげた少女たち
好きだということで迫害された過古
自身がすっかり手に負えない代物になった挙げ句
愛し合おうとおれはいう
愛し合おう、
やがて獣性のなかへと
引き込まれてしまおう、ってさ

聴雨

たかい放水も喪われ
虹のない十月は秋の日よ
いまだ陽の光りのみが鋭くかかって
ひとのおもざしをちがうものにさせていく
あまたの流れのうちにきれぎれになりながら
おれは両の手を隠しに入れて
決してだれにも差しのべはしない
それが信仰をもたないおれの信じてるやりかただ
荒れ地はここにない
エリオットは死んだんだ
一月の初めに
おれは夜半まで待って新神戸駅へと赴く
生田川の上流を長距離バスの発着場から眺めて気づく
秋は事実ここから始まってるんだって

終わりの季節とその磁場
もうこんな気分は懲りごりだ
過古の登場人物をつれあいに生きるのも
もはやだれとも諒解し獲ないだろう
距離をちぢめることもないだろう
――やめておけ！
ハンクは死んだ、――三月の初めに
おれはなぜかしら生きてて
夜の発着場を歩いてる
ああ雨が降ってきた
フラワーロードを
下手からきたダンプ・カァが砂利とともに走ってきた
そして過ぎ去り、おれは雨を聴く
果たしてもういちど会えるだろうかとおもう
懐かしいひとびとにだ
せめて格子越しでも
いいから



天使

きみの番号を教えて欲しい
いつでも声が聞えるようにだ
きみにはいつも世話になってるから
どうしたってお返しがしたいんだ
きみにとってなにが喜びだろうかしら
わたしはわたしでなかったころの記憶を憶えてる
わたしは木の畝にうずくまる哺乳動物で、
麓のホテルから漏れる灯りをいつも物欲しそうに眺めていたんだ
これはいつかきみが教えてくれたこと
まだ憶えているだろうかしら
これまでに何度も病院の寝台のわきできみと一緒に過ごしてきた
二十九歳の六月がとびきり印象深くおもいだせる
眠れないで朝を迎えたとき、

突然温かいものがわたしを包んだのだ
おかしな気分だったけれど気持ちがよかった
胸のうえを大きな手が撫でてるような触りだった
それはたしかにきみの羽の感触だった
わたしはきみに気づいた
そして太陽を見た
永遠そのものが唇ちをあけて笑ってる
いつかまたふたたび会おう
今度は病院のそとで
わたしにとっての疫病神であるアルコールをやりながら、
シェリー酒をやりながら、
今度はきみの告白が聴きたい
産まれたばかりのような、
物語でも
小説なんかでも
ない、
作品以前の作品を

一緒になって回転木馬にゆすぶられながら、
さ、
どうか、
叶いますように、
さ、

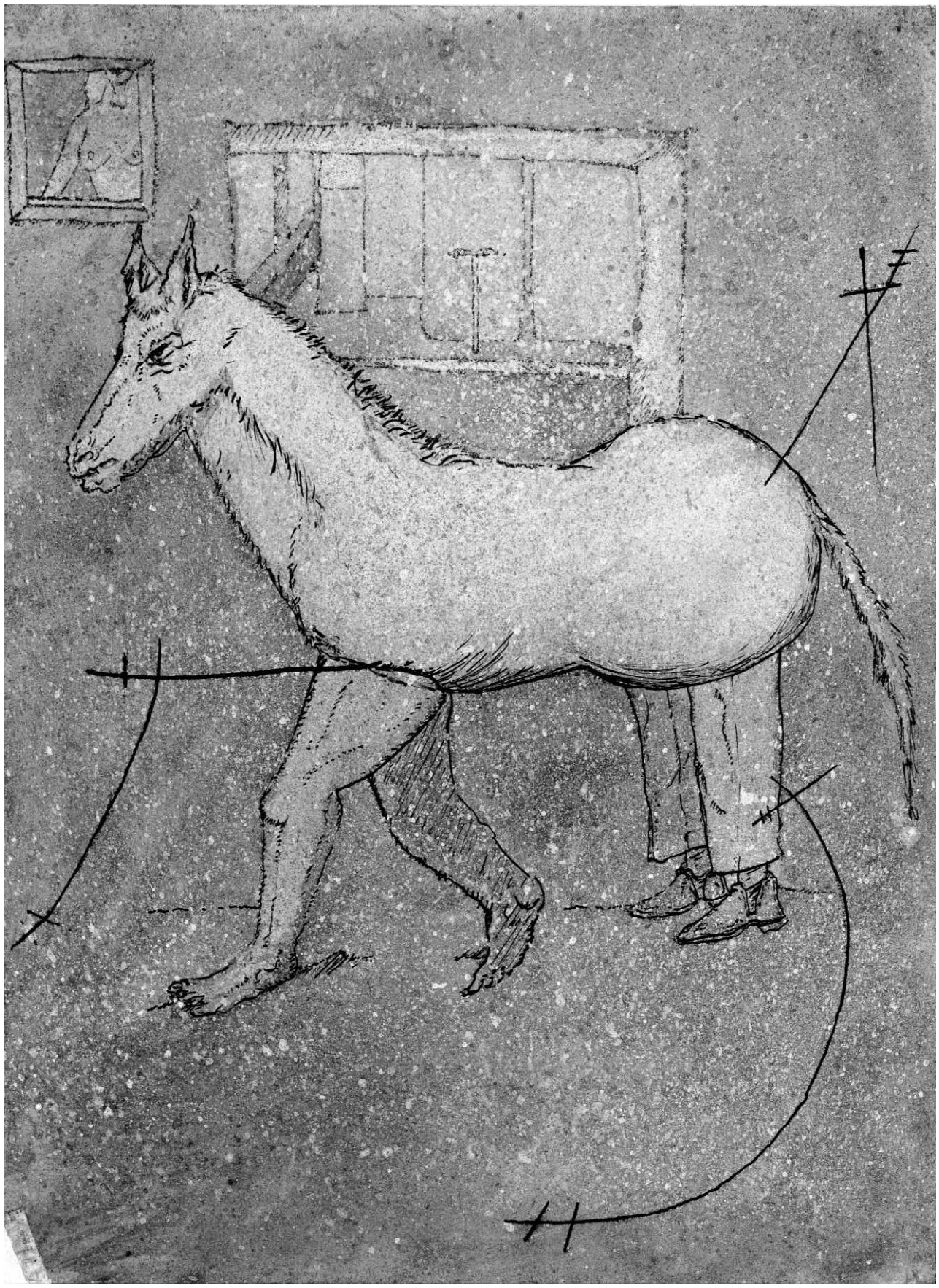
夜。あいもかわらず、かってあったもろもろのために嘖まれてた。おれは気ぶっせいな男で、三〇を過ぎてひとびとに厭がられてる。気味のわるい男だ。いままでにやらかしたことのほとんどをおもいだせる。いずれも本心からの行動ではない。ただ酒に酔って、というのは弁解にもならない。いまとなってはそんなことはどうだっていい。だれも聴いてはくれないのだから。かれらかの女らにしてやれることはただひとつにも別離のみだ。長い道をバスにゆられてきた。またも不採用の決定、また酔う口実ができただけだった。たやすいはずの雑役人すらなれず、発着場に降りると莨に火をつけた。からかうような警笛と信号でいっぱいの通りを北へ急ぎ、酒屋のまえに来た。ややためらって扉をあけ、お気に入りの一本を求めた。それがよくないのはわかってる、ただそれ以上のものがこの世界にはなかった。

どうやら郷愁がつよすぎるのだろうよ、おれは。「孤独であることも、おそらくはなんの誇りにもありえまい。孤独であることによって自分を甘やかしてみても、そういう慰めは永つづきしない。孤独者はふたたび全体への復帰を求めずにはいられなくなるのだ」――どっかの劇作家だったか、だれかがそう書いてた。おれがまさにそんなていたらくだった。そうとも、おれには誇りなどなかった。おれはその存在を孤立のなかに疎外したものたちに受け入れられたがってる。けれどいまさら、どこのだれがこのあぶれものに声をかけてくれるのか。いいや、そんなやつなんかいない。いるのはあいもかわらぬ水平的人間たちだった。かれらみんなが正しく、清潔で、明るい場所だ

った。

かつてある女がいった、――曰く「それでもあなたのせいじゃない」と。たしかにそうかも知れない。べつのやろうがいった――「甘ったれずに働いて汗を掻け」と。どちらが正しいのか、いずれかがまちがってるとでもいうのか。そんなはずはなかった。どちらとも正しいのだ。かれらとは文章のなかでしかつき合いはない。ただ前者のほうがわたしの人生とやらをよく聴いてくれ、知ってくれてたとしかいいようがない。おれはたしかに甘えてる、ひとに信じてもらえない自身に、あるいは信じてない自身の在り方に。遠くで警笛が鳴った。車と車とのあいまを若い男が走ってた。黄色いヤッケが灯しにゆれて、かれは鮮やかな逃亡を見せる。長距離走者になるべくかれは毎晩走ってた。おれはそれを知ってる。

one more thing



no title　無題

夜
かぞきれない、
旅
高架下で眠るルンペンたち
失踪人たち
密入国者、
あるいは逃亡犯
だれもわれわれのために祈りを捧げはしない
わたしはだれの友人？
きみはかれの友人？
ずっと西部の町で氷点下を記録した一月、
荒れ野の渡りものは南へ

ずいぶんまえに忘れたはずのものを夢のなかに再現する
それはとても滑稽であり、あるいはやさしいまぼろしだった
わたしはわたしの内なる友人たちへ手紙を書く
停留所で、避難所で、留置場で、
どやで、サービスエリアで、
発着場で、待合で、
映画館の坐席で、
マーケットで、
飯場で、
かれらはわたしの友人
わたしはきみの友人
世界の果ての駅舎にて毎朝悲鳴が鳴りひびくとき
男たちの内部をいっせいに青い鳥が飛ぶ

そして遊戯はつづけられる——あとがき

どうしてこんなにも警官が多いのか。やつらの車はわたしが坂を降るたびに、角を曲がるたびに、そして大通りで信号待ちをしてるときにも現れる。回転灯を光らせ、静かに。加納町交差点にいたマル暴は消えた。生田町の端っこで街宣車を停めてたやつらも失せた。日の丸を掲げた表札のない新築のむかいでは覆面車が鎮座し、制服警官が立っている。駅前の遊技場、そのまえではたびたびパトカーが停まり、なにかやってる。手入れにしてはしつこい。いったいなんなのか、これでは景観都市ではなく、警官都市である。——そんなことをおもいながら大安亭で喰いものを仕入れる。きょうは鶏胸肉と豆腐、春雨、アボガド、カット野菜、山葵菜のサラダ。ドッレシングは青紫蘇をもとに生姜ペースト、タバスコ、バジル、オリーブ油、オリーブの実、そしてコリアンダーを少し、蜜柑の果汁をたっぷり。わたしは多くの警官たちに守られながら町を歩く。守ってくれといった憶えはない。たしかにやくざものが、組織が多いのもたしかだろう。下町へいけば、防弾扉にまもられ、安っぽいスポーツ・カーを侍らかした建物もある。ずっとまえには即席の街宣車も停められ、黒地に黄色で「反共」と書かれていた。おお、過ぎ去った時代よ。そうおもわずにはいられない。共産主義はすっかり過古の遺物でしかない。左翼でも革新派でもなく、ただ単純におつむの軽い連中をいう。たやすく和平を叫び、たやすく暴力にでる。わかりきった芝居だ。わたし自身は中道でありたい、やや革新がかってるとしても。過古にしがみつくのも、アスパラガスにしがみつくのもご免だ。わたしはわかりやすさに警戒する、極端なものいいに警戒する、単純化され、誇大化されたものを嗅ぎ取る、

二元論から離れる。そんなものに手をださないために、かどわかされないためにも。やくざも政治家も組織社会の極点といってしまえばわかりやすい。かれらの行為や理念はよく似ている。清き1票などというたわごとは信じていない。ものをいうのは、人脈であり、数字のついた透かし入り三叉和紙である。それをわかっていないから、センター街では老人たちが消費期限の切れたデモをやる。学生たちがオルグされる。ほんとうの敵はおもてにはでない。現首相や閣僚を悪魔化したところで、思考がブロック化されてしまうだけだ。もしも憎悪するのならまずは身近なところからと、わたしはいいたい。きみの父を、母を、姉弟を、学友を、隣人たちを。そして自覚を持つんだ、みずからの怒り、憎しみ、悪意、そして虚無を。まずはそこからだ。なぜ組織社会は共食いをはじめるのか、なぜ争いが好きなのか、なぜ同志を撲るのか。そばにだれかがいるのをあたりまえだとおもうひとびとにとって主義や理念ほどおいしいものはないのだろう。わたしは生まれつき、あらゆる組織から脱落してしまったから実際のところ，どうだっていい。殺し合うのなら大切で最愛な仲間うちでやってくれ、わたしの願いはそれだけだ。そろそろ、この詩集について書かなくてはならないからだ。ふるってるのはわたしかも知れない。

ここに収められた詩篇のほとんどは、'14年5月21日から'16年5月11日にかけて書かれたものだ。そこから撰び採られ、ならべられた詩は、前作「38W」と較べていくぶん明るい色を持ち、《いっせいに青い鳥が飛ぶ》ようだ。これらの詩が書かれた時期、わたしは最悪といっていい事態にいた。留置場に2度、精神病院に6度も入れられ、多くのひらびとから――多くはむかしの同級生たちに縁を切られてしまってた。そういう情況にあったためか、ずいぶん大胆に事実を書くようになり、いささか露悪やつくられた態度があるにせよ、素直さが増した。そのなかでも

「アニス」、「拳闘士の休息」、「労働」、「大聖堂」、そして「冷蔵庫のバックパネル」は経験をほとんど、そのままに書いている。このころ、比喩に毒されず、いかに詩を保つか、というのがひとつの課題だった。即物描写と詩情をいかに両立させるか、そんなこともたしか考えていたとおもう。しかしだ、いずれにしてもここにあるような詩ができあがった詩の世界で受け入れられわけもなく、わたしはただただ苛立っていた。幾何学的ななにか、あるいは技術的な、なにかのためにわたしは書くつもりも、奉仕するつもりもなく、ただ書いていた。いまではそんな無軌道な書き方はしなくなった。けっきょくわたしも投稿欄や賞を目指すようになってしまった。出口の見えない暮らしを少しでも変えるために。いささか齢も重ねたし、臆病になったのかも知れない。名声が欲しいとはいってない、書くための時間と場所、そして呑み喰いぐらい、賄わせて欲しいだけだ。もちろん、それだって充分すぎる贅ではあるものの。

「二宮神社」、「新神戸駅」、「夏祭」、「聴雨」は、神戸そのものに捧ぐ詩だ。この町に移ってもう7年になる。ずらかろうって気になるときだって少なくはない。たまにはどっか静かなところで過したい。それでもこの町から得たものは、具象・抽象の境なく、詩や短歌、小説にも役立っている。音楽や写真、思索にもだ。巻頭の「ロードムービー」と終わりの「天使」はもともとひとつの詩だった。「ロードムービー、ロックンロール、アメリカ、天使」という長篇詩である。この題は、キネマ旬報社刊「フィルムメーカーズ11 ヴィム・ヴェンダース」収録、青山真治「未だ知られざる映画作家」から採った。ロックンロールとアメリカを除け、バンズとして使った。わたしはヴェンダースの映画が好きだ。むかしおもった映画監督への夢をさまざなところに再現している。この詩集は文字列による映画表現なのだ。

これを詩画集にしようと考えたのはただ頁数が足りなかったためである。もちろんアイディアとしてはずっとあった。写真のつぎ、カラーで絵を入れたいと。しかし今回は予算の都合によってカラーはだめになり、時間の都合であたらしい絵をほんの少ししか描けなかった。もうずっと絵から遠ざかってしまっていたというのもある。どうか、赦して欲しい。わたしをゲシュタポには引き渡さないで。いまは長篇小説で四苦八苦している。自伝の部分で夥しい失敗をしている。金を喪った。いずれにせよ、ものの書き方を変えていかなければならない。題名に頼ったり、文体に酔うのでなく、ほんとうの試みと主題をもって書くこと。わたしはいつもどこかへ逃げていた。手法や題名、文体、視点に。もうそんなふうにして愉しめるときは過ぎたのだ。去年のいつだったか、「枯槁」という詩を書いた。そのときは「古今和歌集」から単語を拾いつつ、視覚（ヴィジョン）よりも音声（サウンド）で詩を書いてみた。試みはやや巧くいったとおもっている。しばらくわたしはこのやり方で書くかも知れない。とにもかくにも、この詩集を読んでくれるひとびとへありがとうと伝う。

'18年4月15日　なかたみつほ

何時くるかキイ・スミス／森 忠明

＊

三月末、筑摩書房から『１９６８ 文学』なるアンソロジーが贈られてきた。四方田犬彦と福間健二が篇著である。ひらいてみると私がセブンティーンの頃に作った長詩が二篇載っていた。中上健次と永山則夫の詩にはさまれて。解説で四方田犬彦が「時代をすぐれて体現しているにもかかわらず、不当なまでに蔑ろにされたり、また一度も照明が当てられることもなく、忘却に付されてきた文学作品」だけを選んだ、と記しているのをみて、久しぶりに微苦笑の美を味わった。

のっけから私事で、何を言いたいのかというと、中田満帆のこの詩集も五十年ぐらいは「不当なまでに蔑ろにされ」るだろうな、ということである。

当時十代の私には拙詩と自分の価値などわからなかったし、半世紀後の今なお分からない。エジャクレーションに似た快感があったのをおぼえている。本来、暗数としての詩と天涯淪落の詩人に学者流評定は無粋の極みであるわけで、たとえ蔑ろにされたってどうともないのである。

＊

『世界の果ての駅舎』――正直、この詩集の真価も分からない。あとは好きか嫌いかしかないだろう。文質彬彬を理想とするガラパゴス系の私としては、「文」に傾きすぎた彼の詩よりも短歌のほうを高く買っている。あえて選べば「檻」という詩が好きだ。〈どうか信じて欲しい／ぼくというぼくが／新しい事実のための／かげだということを〉。

生という人間動物園の檻から出て自由になるためには、「かげ」という名の解錠キイがどうしても必要であり、〈ぼく〉はその一要素だ、といういささかのヒロイズムがいい。でも〈ぼく〉は、そのキイの鍵穴の位置も、永劫に分からないものなのだ、ということとも分かっているらしいことにも泣けてくる。それゆえに悶すぎる詩や悟りすぎる詩が多い詩集であり、やはり真の読者を得るには半世紀を過ごさねばならないように思われる。

しかし「かげ」という無聲が、あらゆる有聲（文学）に勝ることを、かの白居易ならずとも音楽家であり画家でもある中田満帆は知っている。生あるうち、檻の鍵穴とはちがうホールやマウスを見つけだした彼は、独りジェイル・ブレイクに成功するかも知れない。そうしたら新たなキイ・スミスとして、詩か、それ以外の合鍵を気前よくばらまいてくれるはずだ。

「檻猿いまだ死せず」――私は楽しみに待っている。

＊

詩人・童話作家

著者來歴／なかた みつほ

'84年生まれ。兵庫県神戸市出身。夜間高校卒。詩人、歌人、画家。職業及び住居を転々としながら創作活動をする。'04年より詩人・童話作家=森忠明に師事。'14年より出版局「a missing person's press」を主宰。詩集「38wの紙片」、「終夜営業 ― Open 24 hours ― 発送受付」、個人誌「for MISSING/the MAGAZINE」、そのほか小説、音楽作品、写真作品がある。

Sekai no hateno ekisya poems:2014-2016 © 2018 by Mitzho Nakata, Selected and Afterword by Tadaaki Mori

ISBN:978-4-9909502-2-4-8 C0092 P1200E

世界の果ての驛舍　詩群2014-2016／改訂第2版2021年2月11日

著作・発行　中田満帆

発行所　a missing person's press

〒六五一－〇〇九二　兵庫縣神戸市中央区生田町一－一－十三　新神戸マンション北館三〇三號

〇七八－二〇〇－六八七四／mitzho84@gmail.com